

# WWF2023 会場構成案

大貫友瑞・仲野耕介・笹田侑志（東京藝術大学）

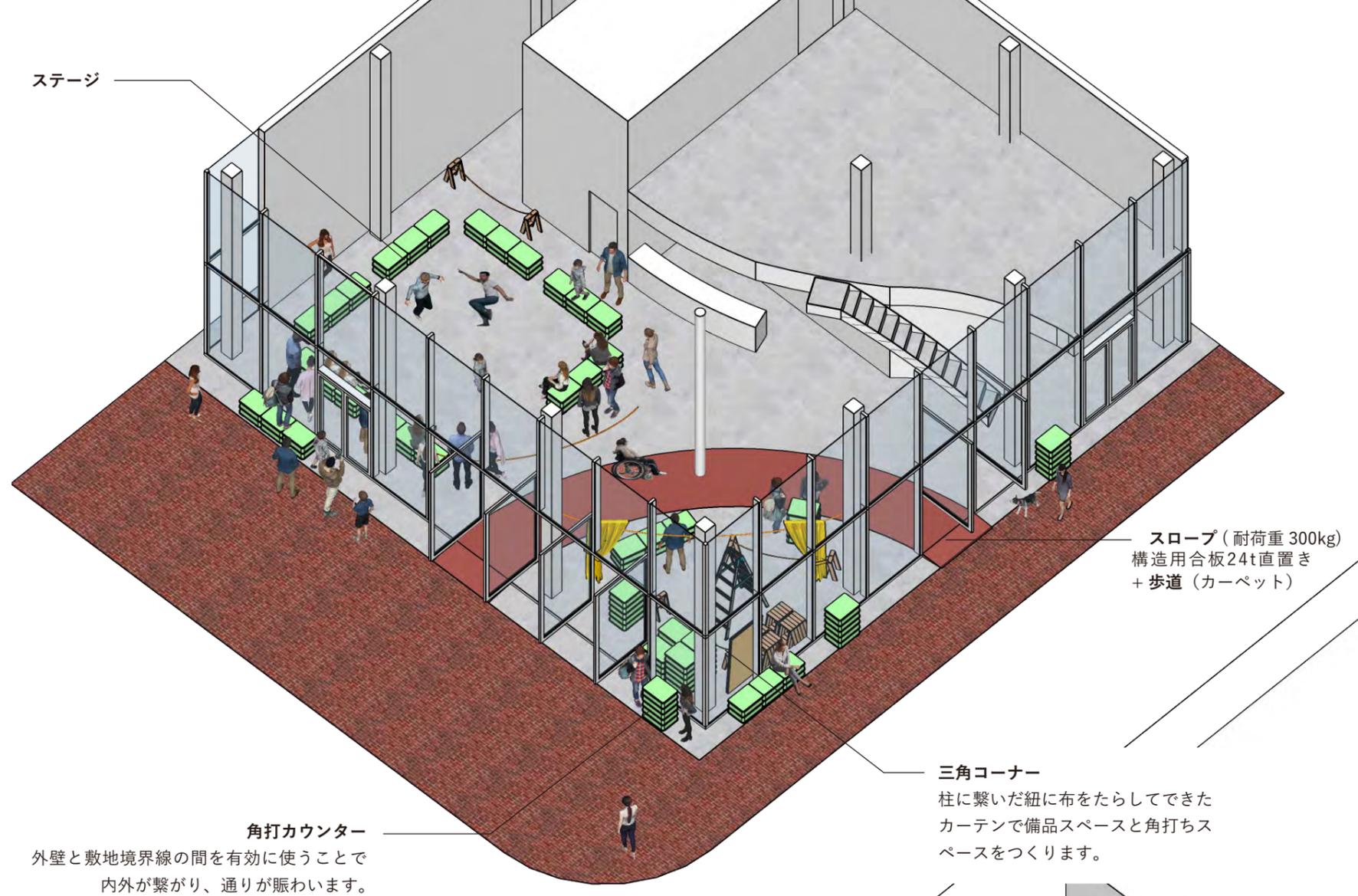
劇場でパフォーマーと観客が2時間を共にする観賞の仕方であれば、公園で大道芸人の周りで歩みを止めて観賞した立ち去るような観賞の仕方もあります。パフォーマー・観客・プログラムの参加者といった階層の異なるプレイヤーが多様な立場のまま同じ場所を共有できること、あるいはその場所の成り立ちにすら関わるといふこと、それが公共性であると考えます。

ガラス張りの外壁を持つ SHIBAURA HOUSE は透明で視認性が高いが故に入りにくさを産むこともあるかも知れません。むしろ、ある程度の猥雑さを作り出し、透明なショーケースではなく、道端で偶然出会うストリートパフォーマンスを人だかりの肩越しに覗き見るような、内と外あるいは来訪者と通行人の緩い関係性を生み出すことが障壁をなくすことにつながるのではないかと考えます。

そこで、私たちはこの空間が二面で歩道に面していることに注目し、それぞれの道に面した出入口を結ぶ一本の太い線をひくことから始めます。この線は二つの道のショートカットであると共に、空間を緩やかに二分し、パフォーマンスを見に来た人も、そうでない人も同じ空間にいられる距離感を作りだします。この線によって生まれるコーナーはちょうど二つの通りの交差する位置でもあるため、内外どちらにも属する中間帯として道ゆく人を巻き込む契機にもなるでしょう。

この太い線を骨格としつつ、パフォーマンスに必要な細かい設えは既存の備品を細い線＝紐でつなぐことで作ります。スツール、プラケース、柱、椅子など様々なオブジェクトに、紐をかける、結び合わせる、束ねるなどの手を加え、ベンチ、結界、カウンターといった使い方ができるように変化させます。それらの配置によって多岐にわたるプログラムに柔軟に対応しながら、同時にカジュアルな猥雑さも作り出します。

なにかとなにかをリテラルにつなぐことで生まれる空間やオブジェクト群が、つながれる以前のものが持っていた意味や機能を超越して人々の新しいアフォーダンスとなる時、物理的、あるいは心理的なアクセシビリティが生まれるのではないかと考えました。



ステージ

スロープ（耐荷重 300kg）  
構造用合板24t直置き  
+ 歩道（カーペット）

三角コーナー

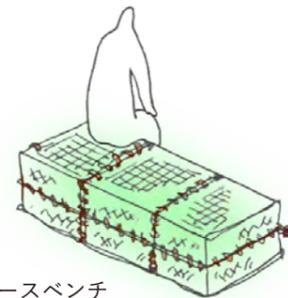
柱に繫いだ紐に布をたらしでできたカーテンで備品スペースと角打ちスペースをつくります。

角打カウンター

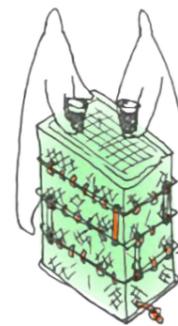
外壁と敷地境界線の間を有効に使うことで内外が繋がり、通りが賑わいます。

## 什器 DIY イメージ

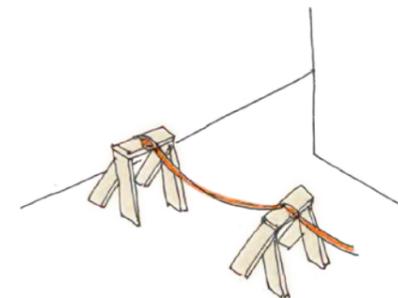
既存の備品や柱など + 「紐」 を使って、必要な機能に合わせた什器や設えをつくる。



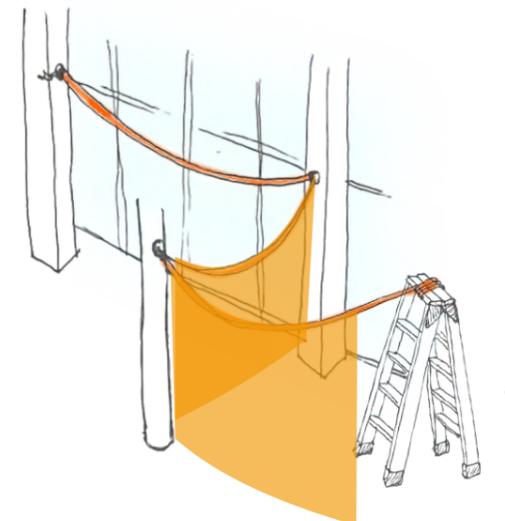
プラケースベンチ



プラケース角打カウンター



AA スツール結界



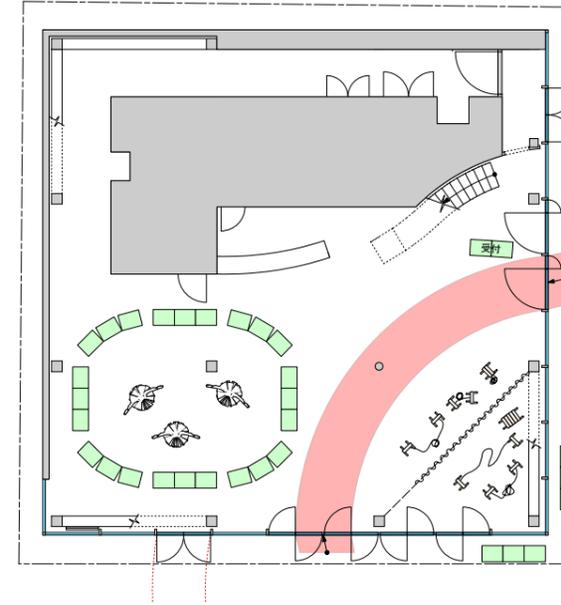
紐カーテン

## レイアウトパターン (例)



### トークイベント

歩道の左側に舞台と客席。右側の三角コーナーに使わない備品を並べます。歩道は何をやっているか気になった人がふらっと立ち寄りイベントを眺める場となります。三角コーナーと歩道の間では、トークイベントから距離をとって小声で雑談などができます。



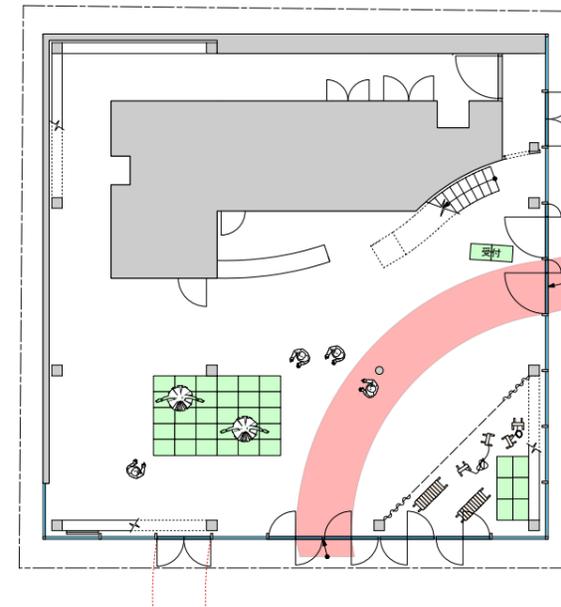
### ショーケース

中心にステージ、それを囲むような客席の配置もできます。歩道にやってきた人がもっとみてみたいと思った場合、三角コーナーと歩道の間で見続けることもできます。



### ワークショップ

主催者と参加者がごちゃまぜになって話したり、動いたりするワークショップでは、ツールやプラケースを自由に動かします。さらに広い場所が必要になったら、三角コーナーを使ったり、時にはツールやプラケースを屋外に持ち出して場を作ることができます。



### 盆踊り

会場全体を使って中心にプラケースを並べて舞台を作り、その周りを参加者が取り囲み盆踊りができます。角打ちカウンターを配置して街とつながるお祭りのようになります。